

邂逅

村上 馨

出雲の実家に転居して二か月あまり、仕事への道すがら、何となく気になる場所がある。そこは、もうかれこれ、四十年ばかり足も遠のいている場所ではあるが、心の片隅でいつか再訪したいと念じている場所もある。
そこは、神門寺『かんどじ』という法然開祖の浄土宗の古刹なのであるが、この寺の近くにかつて同人誌仲間だった詩を書く女性の家があり、時折、家に上がり込み、互いの作品を評したり、語り合うなど、文学談義をし過ごすことが度々あつた。
そして帰路、二人して近くにあるこの寺にお参りしてから、別れると言うのが、会つたときの習慣のようになつていた。
ある日のこと、本堂へと向かう長い真っ直ぐな道をゆっくりと歩いていると、俯きながら

ら、彼女がぽつりと言った。

「近所の人が、あなたとのことをのっぴきならぬ関係じゃないかって噂してるので。あらぬことを勝手に想像しては茶飲み話のネタにするよね」

「そうだったのか、道理で最近少し様子がおかしいと思つたよ」

「どうしたらいい？」

「そうだなあ、じゃあ、こうしよう。もう家に行くのはやめにして、電話するので、この寺で落ち会おう。そして、そのまま、この寺で別れよう。寺へお参りするぶんには、怪しむ人もいないだろう。家にはもう行かない方がない」

「そうよね、わかつたわ。じゃあそうする」

「いい」

本堂を辞し、長い参道をゆっくりと歩を進めその日は、暮れなずむ秋の日の夕刻だった。る日のこと。

そうして、何度もこの寺で逢瀬を重ねたあ

ていた。陽が山影にかかるば、落ちるのは目に見えるほど速い。あたりは見る見る暗く沈んで行く。迫り来る宵闇が私たちの姿を風景の中から消しはじめていた。

その暗闇に乗じて、私は右手で隣を歩く彼女の左手をさりげなく握った。すると、彼女のが私の手を、その指先で逆に強く握り返した。

私は無言の諾であり、未来を約束するよ

うにすら思えた心ときめく瞬間であり、躰の芯まで熱くした瞬間だつた。

した。

に知つた。

り、婚姻がまとまつたらしくして、私は彼女に縁談を持ち上が

らしさばらくして、私は彼女に縁談を持ち上が

だが、そんな私の思いとは裏腹に、それから

あるが、ふと、あることに思い当たつた。ついでにわざわざ耳を疑い、しばし呆然としていたので

とは裏腹に、今までありがとうございました。私が握り返した左手は、私の都合のいい想像

別れ言葉を意味していたのではなかつたか、
と。思え巴、彼女は私を傷つけまいとして、て

いのよい嘘のうわさ話で私を家から遠ざけ、
寺で逢おうと言う私の提案を受け入れもして、
少しずつ、別れの階段を下りて行こうとして
いたのかもしれない。その後は、彼女からもう連絡はなかつたし、
私の方も、なぜか電話することすら憚られ連絡を絶つた。

展示したものである。興趣が湧いた私は、一点ずつ作品と作者に
れていた。無論市内の有力作家たちの作品を
た新庁舎の通路には、大きな絵や書が掛けら
へ出ようとしたのだが、立派に建てかえられ
の手続きに行つた。新たな住民票を取り、外
転居してまもなく、私は市役所へ住所移転
無為に過ぎている。そのまま、あれから四十年ばかりの歳月が

一トールくらいはあるだろうか、草書で大書さ
れた大きな額の前で、はたと立ち止まつた。
そして、縦三メ
目を運びながら観て回つた。そして、縦三メ
書の横には、忘れもしないその名が刻されて
いたのである。
独 特 な 筆 名 だ つた の で 、 別 人 で あ る こ と は 、
ま ず あ り 得 な い 。 書 も 嗜 ん で い る こ と は 、 知
つ て い た が 、 こ こ ま で 極 め た と は 驚 き で あ る 。
東 の 野 に 炎 の 立 つ 見 え て
か へ り 見 す れ ば 月 傾 き ぬ
ひ む か し の の に か ぎ ろ い の た つ み え て
か へ り み す れ ば つ き か た ぶ き ぬ
島 根 県 の 益 田 市 が 終 焉 の 地 と さ れ る 有 力 説
も あ る 、 か の 柿 本 人 麻 呂 の 歌 で あ る 。 ど う い
う わ け で 、 こ の 歌 を 認 め た も の の か 知 る 由 も な
い が 、 妙 に 最 後 と な つ た あ の 寺 で の ふ た り の

なぜか居ても立ってもいられず、その足で神門寺へと向かつた。
県道から右折する寺への道筋は、間違えようはないし、大きな伽藍で、遠くからでも、すぐそれとわかるはずなのだが、どこまで行つても、それらしき古刹は見当らない。當時寺の周りは見渡す限り田園で、民家はところどころ疎らに点在するだけだが、今その面影はまったくない。

野中の一軒家風だった彼女の家も、どのあたり整備され、モダンな民家が軒を連ねていた。場所を間違えたかと思うほど、道路は新しくなりになるのか、さっぱり見当もつかない。

しかたなく誰かに道を訊ねようと、同じ道を行ったり来たりを繰り返しているうちに、似合いな古風な家があり、その横に小さな畑があり、そこで野良仕事をする婦人の姿があつた。

てて車を停めてハザードを点灯させた。道幅が狭く、長居はできないので、その婦人めがけて走り寄った。

「すみません、神門寺へはどう行けばいいんですか？四十年ばかり前には、よく来ていましたんですが、あたりがすっかり変わっていて、迷つてしまつたものでして……」

すると婦人は、いくぶん怪訝な眼差しで私を見つめながら、通りの方を指さし、「すぐその先に郵便ポストが見えますでしょ、看板が出てますから、すぐに行くと、駐車場の案内そここの角を折れて少し行くと、駐車場の案内しげと見つめた。

「ありがとうございます」と言つて、車に戻るうと踵を返そうとする、婦人が、突然私を呼び止め、「もしかすると、婦人めがけて走り寄った。

「ええ……」とだけは答えた私だが、

「ええ……」と言つた。

野良で薄汚れた作業着に身を包んだその婦人には、心当たりはない。私は怪訝そうに婦人を見つめたままだ。

「そう言つて、かぶつていた帽子を取り、日に焼けた化粧氣もないその顔で、私を瞬きもせずじつと見つめつづけた。言われてみれば、その目元、その眼差し……。

歳月が姿をかたちを変えているとは言え、そこには紛れもなく、その人が立っていたのだ。とたんに私は、はっとして身がすくんだ。

私はを見つめる時の、その目元、その眼差しだけは、あの日のままだ。

「もしかして、○○さん？」

「いがけない邂逅であることか……。何といふ時のことか、そして何という思いがけないと、うの日のいたずら、そして何といふ思ふと、頷いた婦人の頬が俄にゆるんだ。

「奇遇ですわね、これは夢なんかしら？」

「ほんとに、そうですね。こんなところで、まさかあなたに出くわそうとは夢にも思いま

せんでしたよ」

それから、彼女は少しばつの悪そうな顔を私に向けて言った。

「あのとき、きちんとお話ししなければいけなかつたのですが、言えなくて……」

「やめましょう、それはぼくも同じですから。臆病だったのですが、ふたりとも」

「あのね、村上さん、わたし今はもうここには住んでいません。今日は、昔からお知り

合いのこの家の方に畠を借りて野菜作らせてもらつていて、この時間こうしてここにいる

のもほんの偶然、たまたまのことでのの

こと、びっくりですわ」

今度は満面に笑みをこぼしながら、彼女が

言った。

「まさか、こんな形であなたにお逢いできようとはね……。ぼくの方も、今日の前で起きてることが現実とは、どうしても信じられませんよ。そもそも、今日はここへぼくが来ようと思ひ立つたのは、住民票を松江から出雲

へ移すために市役所へ行つて、そのロビーであなたの書を見たからなんですよ」

すると今度は彼女の目が驚きをもつて私を見返した。

「まあ、うれしい。あれをあなたに、ご覧になつていただけたなんて・・・」

「流麗な筆遣いで感服しましたよ。それに柿本人麻呂のあの歌がとてね意味深く感じられましてね」

「そんなふうにおっしゃらないでください。お恥ずかしいかぎりです」

「彼女は目を伏せた。そしてそれ以上は語ろうとはしなかつた。

「これから、お寺へお参りしますが、よろしくあつたらご一緒しませんか」

私は彼女を誘つた。

「こんな格好で、あなたといつしょには歩けませんわ」

「そんなことは、とても不思議な縁。今を逃したら

もう二度とやつて来てはくれない千載一遇の

縁ですよ、これは」「わかりましたわ。じゃあ、ちょっとここか

ら離れててください」

そう言うと、彼女は服に付いた土埃を手際よくパツパツと払い落とし、帽子を取り、髪を手で梳かしてから、「顔は直しようがないですわね」と言つて、けらけらと笑つた。その仕草は、老いてもなお在りし日の可愛さを持していく、愛おしくさえ思えた。

見覚えのある長い参道をゆっくりと歩いて本道へ向かつた。その昔、土道だった参道は、きれいに舗装されていて当時の素朴な風情はもうなかつた。それでも山門をくぐると、そこはまだ昔のままの姿を留めていて懐かしかつた。

歩きながら、私は考える。これは復縁ではない。時が思いを洗い流してくれたればこそ、

今この時しかない、尊い縁と言うものもあるはずだ。

今、裏庭には木漏れ日が射し込み、苔むす地面上に影絵のような紋様を作る。首からそのまま、ぽとりと落ちた椿の花は、地に落ちてなお花咲かせては、その矜持を誇る。

日陰にひつそり咲いていた石蕗（つわぶき）

は、枯れ果ててなお、その花の面影をそのまま地上に宿し、ただ黙している。裏庭のその寂れた佇まいほどに、ふたりのあれからを、あれこれと語り合うほどには、時間もないし、あまり意味もない。意味があるとすれば、この縁をこれから、なにがしかの力に変えることだけのかもしれない。彼女とは、あの日のようになにがしかの力に変える世間話と文学談義に終始した。

どれほど時間が過ぎたろうか。
やはりあの日のように、陽が傾き、帰り道の参道は、暮れなずむ、ぼんやりとした薄茜色の

に染まりはじめていた。

そして、私は、勇を鼓して、あの日のようには、まるで、あの日の再現のようではあつたが、あの日起きた私たちの大きいなる誤解とは違つて、今日この日だけに起きた奇跡でもあるかのように、そしてそれはまた、ほんのさやかな出来事ではあつたにしても、確かに真実と受け止めてもよいことのように思われた。すべては明日のために。出逢つた家まで彼女を送り返し、「じゃあ」とだけ言つて別れた。薄闇の中、動き出した車のバックミラーに、いつまでも手を振りつづける彼女の姿が、今にも落ちなんとする西日を浴びてやけに明るく映つていた。